

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	三宅 美千代
論文題目	D・H・ロレンスとナショナリズム 『虹』以降の主要作品にみるネイション＝ステイト観
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、19世紀のヨーロッパ内外でのネイションの形成とナショナリズムの台頭が、イギリス人作家D. H. ロレンスの執筆活動にどのような影響を与えたかを検証したものである。19世紀以降の世界規模でのナショナリズムの台頭という歴史的パースペクティブのなかにロレンスの作品を位置づけ、『虹』以降の主要な長編小説を中心に著作の再読を試みることで、近代以降で確立したネイション＝ステイトという統治形態への批判と、それを超越する政治共同体の探究が小説を書くという実践においていかに試みられているかを明らかにしている。</p> <p>先行研究は、ロレンスのナショナル・アイデンティティやネイションとの関係に繰り返し言及してきたが、ネイション＝ステイトという政治共同体について作家がどのような見解を持っていたのかには十分に触れてこなかった。また、批評家は作家とネイションの関係をヨーロッパ内部の問題として、とくにブリテン帝国との関係に限定する形で論じてきた。これに対し、三宅氏はロレンスが実際に訪れた国々のそれぞれ個別のナショナリズムをめぐる状況 ネイション＝ステイトの成立事情・過程、ネイション概念の特徴や問題点 に関して緻密なリサーチを行い、ローカルな視点からとらえた歴史・社会・文化的文脈の中に作品を置いて、作家がそれぞれの国民共同体形成の場にどのように立ち会ったのかを検討し、それが作品にどう反映しているか検証するという手順をとっている。これまでにない斬新な研究で、その手際も鮮やかである。</p> <p>本論文は序章、5章からなる本論、及び結論から成る。</p> <p>まず、序章で、小説が近代ヨーロッパでのネイション＝ステイトの確立やナショナリズムの勃興と密接な関係を持ち、ネイションという「想像の共同体」を創出する上で一定の役割を果たしたことを論じ、さらに、ロレンスが作家として活動していた20世紀初頭までのブリテン島におけるネイション、ナショナリズムの形成と発達、その特徴を明らかにしている。また、第一次大戦の総力戦体制下で、ドイツ人の妻を持つことからスパイ容疑をかけられ非国民として警察の監視下に置かれた経験が、ネイション＝ステイトが内包する国民の包摂と非国民の排除という二面性と暴力性をロレンスに知らしめ、近代的ネイション＝ステイト体制とナショナリズムに対する猜疑心と反発を植え付けたことを指摘している。</p> <p>第1章「移民と帝国のナショナリズム 移民の物語として読む『虹』」では、『虹』を多民族性とイングランドの混血化を描いた物語として読み、ブリテン帝国のナショナリズム、及び1918年の国家再興以前のポーランド・ナショナリズムの取り扱いを分析し、複数の帰属先とアイデンティティを持ち、ネイション＝ステイトの境界に位置する移民の特性に作家が何を託しているか考察している。その際、登場人物を「ノマド」と「定住者」の志向に分けて読み解く発想は新しく、『虹』以外のロレンス作品を読み解く上でも重要な鍵となることが審査会で評価された。</p> <p>第2章「ナショナリズム批評装置としての音楽 『アーロンの杖』再読」では、大戦直後のイギリスとイタリアでの経験をもとに書かれた『アーロンの杖』における音楽表象を、芸術とネイションの関係についての考えを著わしたのものとして、音楽社会学的視点から読み解いて見せた。芸術の産業主義化と大衆消費時代の到来により、音楽演奏空間が市民を国家・政治的イデオロギーに包摂する</p>	

場となりうることに、それに対する作家の危機意識を指摘している。いわゆる「指導者小説群」と呼ばれる一連の作品に対する新しいアプローチである。

第3章「『カンガルー』とコロニアル・ナショナリズム」では、連邦国家設立前後のオーストラリアのナショナリズムとネイション概念を踏まえて、『カンガルー』に描かれた主人公のイギリス人と現地の友人たちとの政治的交流を考察している。ヨーロッパ・コンプレックスと白豪主義的排外性を併せ持つオーストラリア独特のネイション概念やナショナリズムの権力図式が、先住民や女性の表象にも影響していることを指摘している。

第4章「革命期のメキシコのナショナリズムと『羽毛の蛇』」では、当時のインディヘニスモと呼ばれるナショナリズムの特徴を踏まえて、『羽毛の蛇』を非西欧のサバルタン・ナショナリズムを描いた物語として読み解いている。これまで多くの読者を困惑させてきたケツアルコアトルの祭儀描写は、ポストコロニアル期メキシコにおける新たな伝統創出という役割が与えられていることを明らかにしている。

第5章「福音主義ナショナリズム批判としての『アポカリプス』」では、英米のナショナリズムにおけるリベラル・デモクラシーの伝統とそれを政治・宗教両面で支えてきたキリスト教千年王国論の影響関係を踏まえて、ロレンスの黙示録理解が政治イデオロギーとしてどのような射程を持つかを考察している。これまで宗教的テキストとして読まれてきた本書に対する大胆な分析である。

こうして、作家の関心が特定のナショナリズムのイデオロギーを擁護することになく、ネイション＝ステイトという共同体の形成をめぐる、さまざまな国籍、人種、民族、社会的地位にある人間がどのように行動し、どのように思考するかを、その複雑な因果関係や思考過程も含めて、そのまま提示することになった、と結論付けている。

これまで「はじめにロレンスの思想ありき」という姿勢で読まれてきたロレンス文学に対し、むしろ事実をもとに作品創作を通してロレンスの考え方が形成されていったとする斬新なアプローチで、新たな読みの方向性を示した成果は大きい。審査の過程で、ロレンスの集大成ともいえるべき『チャタレイ夫人の恋人』に対する同じアプローチによる分析や、幼少期からの家族の宗教観や国家観などの影響などにも目配せが必要ではないか、などの指摘もあったが、いずれも本論文の学術的意義を損なうものではなく、むしろ、これまでにないロレンス研究の新たな道を開いた本論文の価値を再確認するものであった。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに十分値するものと判断される。

公開審査会開催日	2011年1月8日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授		小田島 恒志
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授		大島 一彦
審査委員	早稲田大学国際学術院 教授		大平 章
審査委員	慶應義塾大学法学部 教授	Ph.D.(ウォリック大学)	武藤 浩史
審査委員	成城大学文芸学部 准教授		木下 誠